

[発行] 札幌市教育文化会館
アクト第24号

act

art,
culture,
tradition

24

November 2016



砂連尾理
ダンスのあわい

ダンスと世界の〈間〉^{あわい}に立つ。

ここ数年、札幌に足を運び、一風変わったダンスのあり方を提示し続けてくれるダンサー／振付家がいる。彼の生み出すワークショップやダンス公演は、お年寄り、特別養護老人ホームの職員、近隣住民などの関わりから生まれ、いまアートや介護の世界から、静かな注目を浴びている。ダンスや介護、さらには日常にある「振りつけられた身体」をほぐす、あらたな身体コミュニケーションの水先案内人。砂連尾 理。





[インタビュー]

砂連尾理 × 櫻井ヒロ

人は、誰もが躍りを楽しむ生きもの

日常に視点を置き、これまでにないダンスを模索するダンサー／振付家の砂連尾理。
コミュニティダンスから演劇まで、幅広く活躍する札幌のダンサー／ファシリテーター、櫻井ヒロ。
札幌市教育文化会館主催「ダンスシンポジウム」で出会った二人が、
教文ダンス事業をかさねることで見えてきた、北のダンスの地平線とは。

○聞き手：桑原和彦(前教育文化会館事業係長)

桑原 2014年から、砂連尾さんには毎年講師としてダンスシンポジウムに参加していただいています。砂連尾さんはグループホームなどで、入居者とのワークショップや舞台公演などもされている方です。教文のダンス事業でもグループホームや養護学校などでアウトリーチを行っていたので、一緒に出来ることのあるのでは、と声をおかけしました。介護老人保健施設などで活動を続けるダンサーは砂連尾さんが先駆けかと思えますが、始めてからどれくらいになりますか。

砂連尾 7年目ですね。僕よりも先に老健施設などで活動していた方はいらっしゃいますが、同じ施設で長期にわたって関わっているダンサーは、なかなかいないと思います。コンテンポラリーダンス自体がダンスのメインストリームから少し外れていて、その中でも僕の活動はさらにエッジの部分にあるんです。ですが、そこに表現の本質に迫るものがある、と桑原さんに言っていただいたんです。今まで舞台上上がっていませんでした。仲間だけで踊るだけですが、楽しく、仲間だけで楽しく、芸術性も加わったものを教文で創りたい。そこからどんなことをやってみようかと、対話が始まりましたね。

桑原 人と人の新しい関係を求めるのが公共のホールとしては必要なんじゃないかと。砂連尾さんはワークショップ参加者に今までに見たことがないような対話でアプローチして、ダンスの技術的な意味とは違う面白さを導き出すのに長けているんですね。参加者本人も気づかなかった答えがみつかるような。

砂連尾 身体って、無意識なところで振りつけられているって僕は思っています。たとえば信号があったら止まるでしょう。それは社会の規範ともいえるけど、振りつけられているとも

いえる。そこに規範とは違う角度で切り込んでいくと、思わず笑ったり面白い反応がでる。そういう思わず出たものに、関心があるんです。

櫻井 砂連尾さんは物腰柔らかな人ですけど、対話とか言葉でぐいっと本質に迫ってきますよね。最初のシンポジウムが終わった後、僕が砂連尾さんに言われたのが「やりたいことをされたらどうですか」って。僕は教文のコミュニティダンス部のまとめ役でしたが、みんな立場も考え方も違って、どう運営していくか悩んでいた時期だった。そんな僕らの発表をシンポジウムで観て、核心を突いた言葉でアドバイスをもらったんです。それがターニングポイントになり、その後のコミュニティダンス部の方向も決まりました。

砂連尾 2年目にシンポジウムでお会いした時、やっと出会い直した感じでしたね。それで、さあこれから何を一緒に創っていくか、と。そのあと仙台の僕の公演をヒロさん(と桑原さん)が観に来てくれて(*1)。

櫻井 仙台の公演を観て、すごいついて思ったんです。僕はダンスを始めるのが遅かったし、自分の踊りにコンプレックスがすごくある。だから自分にしかできないダンスを創ろうと頑張ってきたんですが、砂連尾さんの舞台は想像の斜め上をいっていた。普通、ダンサーは非日常を表現しようとする。普段見ているものと違うものを外の世界に探しに行って、それを表現しようとする。でも砂連尾さんはまったく逆のアプローチで、普段の生活の中にダンスを発掘していく。さっきお話ししていた信号で止まるとか、家の中での人それぞれがしている何気ない動作を、それじゃあ動きにしてみようって切り取ってみると、それがダンスに見える。こ

うやってこの人はダンスを発掘していくんだって驚きました。

桑原 日常というワードが出てきたところで、砂連尾さんがこれから教文でもワークショップを行いながら創りあげていく「The home dance」(*2)について伺いたいのですが、これは、日常をダンスによって深く掘り下げていくという過程があると。

砂連尾 家って閉ざされた空間なので、習慣的に何かしていても人に見せるものじゃないですよ。ですから、それを表現とは誰も思っていない。でも、たとえば今回のワークショップの参加者に毎年ジャム作りをしている人がいるんです。その人にはジャムを贈ったり食べてくれる人がいて、そういう捧げものを作る動作って美しいと思うんです。そんな動きの一部をスローモーションでやってみましょうか、とか作り方を口で教えずに伝えてみましょうか、と動きを生みだしていく。今回は「人は誰もが躍ることを楽しむ生きもの」というのがコンセプトのひとつです。技術がなければできない踊りじゃなくて、あなたそのものを楽しんでください、と。それに、その人にとっては当たり前のことかもしれませんが、改めて動いてもらうことで、観ている人が家の中で行われている動きを味わいなおしていくきっかけになる。僕は2014年に「家から生まれたダンス」を創ったんですが、それは東日本大震災での避難所生活をしている方のインタビューを経ての作品なんです。何人かのインタビューから聞いた言葉は、「二度と嫌だけど、経験してよかった。何が自分にとって大切かがわかった」というものだったんですね。近代以降は速く・高く・遠くへというのが豊かさの指標でした。けれども、とどまって、じっくり味わって、止まるとい

う中にも豊かさはあるんじゃないかな、と。インタビューを通して聞いた声を、しっかりと違う形でいいから届けていきたいですね。

櫻井 こういう視点でダンスを体験したり観るっていうのは、札幌ではなかなかない機会。札幌での「The home dance」は僕も砂連尾さんと一緒に活動していきますし、ここから北海道でしか生まれないものを見つけていきたいと思っています。

*1 2014年3月に舞鶴で初演されたダンス公演「とつとつダンス part2.愛のレッスン」の全国巡回ツアーの仙台公演。舞鶴市内の特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」の認知症高齢者と共にする舞台公演は、

*2 「The home dance」ワーク・イン・プログレスは、2016年9月のワークショップ、スタジオショーイング(発表)を経て、2017年2月18日(土)に小ホールにて発表公演を行います。

ト
ク
ロ
ニ
ー
フ
ム

砂連尾理

Osamu Jyareo

[振付家・ダンサー]

2002年、「TOYOTA CHAREOGRAPHY AWARD 2002」にて、「次代を担う振付家賞」(グランプリ)、「オーディエンス賞」をW受賞。2004年、京都市芸術文化特別奨励者。2008年度文化庁・在外研修員としてドイツ・ベルリンに1年滞在。近年は、ソロ活動を中心に、振付・出演など多方面に精力的な活動を展開している。



櫻井ヒロ

Hiro Sakurai

[ダンサー・ファシリテーター]

札幌市教育文化会館での子どもから高齢者まで参加できる「教文コミュニティダンス部」では、参加者一人ひとりの身体の持つ独自性を目を向けたプログラムを行う。2014年には京都芸術センター主催dance4allにて伊藤キム、アオキ裕キ、北村成美などの全国公募作品と一緒に、北海道代表として2010年の作品「あしあと」を再演。

砂連尾理
とつとつダンス
メソッド

いつもの家の中で踊る。目に入ったものを踊る。

カラーページでのダンスは、誰にでもできる、

3つのダンスから作られています。

身体をメディア(媒体)にする面白さを、

ぜひ体験してみてください。



何かをみて、それになる

気になる身近なモノを見ながら、「それ」になるようイメージする。「それ」から見えるもの、何を感じているかを身体で探る。モノと自分の境界線があいまいになっていきます。

脈拍ダンス

自分の、あるいは誰かの脈拍のリズムを身体にしみ込ませる。自分とは異なる他人のリズムやテンポを、身体の様々な部位で表現してみよう。

落下ダンス

ハンカチや落ち葉、時には小石を落とし、落下の様子やスピードに合わせて、床に身体を落としていく。落下物がそれぞれ描く軌跡と共に踊れば、重力と踊ることになる。

砂連尾理を知る3つのキーワード

コンテンポラリーダンサー、振付家…そんな枠では収まらない砂連尾さんをもっと知るために、ワークショップ参加者などから集めた、砂連尾さんらしいキーワードをご紹介します。

武道家

合気道の黒帯有段者。「合気道には『居着かない』という言葉がある。何かに居つくことは、身体を固定してしまう」と、砂連尾さん。ダンスらしくないともいわれる彼の動きの理由のひとつ、かもしれない。

接着剤

ある人は彼のことを粘着質ともいう。「自分自身そのものを楽しむために」どこまでも深く掘り下げて考え、思いもよらないものを結びつけたダンスが生まれる。

質問魔

ダンスを教える以上に質問し、会話する事がしばしば多い砂連尾さん。しかし、彼ならではの切り込んだ質問が、新鮮な身体の動きを誕生させることも。

公演情報

ダンスワークショップ発表公演

「The home dance」
ワーク・イン・プログレス

[日 時] 2017年2月18日(土) 14:00開演
※開場は開演の30分前

[全 場] 札幌市教育文化会館 小ホール

[料 金] 500円(全席自由)

[出 演] 砂連尾理、櫻井ヒロ、河野千晶、ワークショップ受講生 ほか

[お問合せ] 札幌市教育文化会館 事業課 TEL.011-271-5822



ワークショップの様子